

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 16 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23500758

研究課題名(和文) 地域振興のための自律型スポーツクラブの経営モデルの構築

研究課題名(英文) Constructing the management model of self-reliant community sports club in order to reconstruct the community.

研究代表者

平田 竹男 (HIRATA, Takeo)

早稲田大学・スポーツ科学学術院・教授

研究者番号：00445868

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円、(間接経費) 870,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、プロサッカークラブが持続的に成長していくために必要な施策や成功要因を明らかにすることである。研究方法は既存の資料分析および当事者へのインタビューを用いた。その結果、プロサッカークラブが持続的に成長していくためには、対戦チームに応じたチケット料金制の検討やユース育成に注力することがチームの成長に欠かせない要因であることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：One fact is that when thinking about the revenue in club management, it is important to ensure that the revenues in entrance fee and advertisement are equally matched, which creates stable income. In this management model, it is required to construct a business model that develops the club by ensuring the revenue which is invested in strengthening the athletes.

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学 スポーツ科学

キーワード：プロサッカークラブ 自律型経営 スポーツによる地域振興 スポーツクラブ経営モデル スポーツマネジメント

1. 研究開始当初の背景

2010年に文部科学省が策定した「スポーツ立国戦略」ではスポーツの社会的意義として「スポーツは、人格の形成、体力の向上、健康長寿の礎であるとともに、地域の活性化や、スポーツ産業の広がりによる経済的効果など、明るく豊かで活力に満ちた社会を形成する上で欠かすことのできない存在」と定義しており、こうした地域活性化のモデルケースを、スポーツビジネスの深くかつ多角的な研究によって示唆できると考える。

しかし現在、全ての地域におけるプロスポーツクラブが必ずしも地域振興に成功しているかというところではなく、近年の不況の煽りも受け、経営すらうまくいっていないクラブも多いのが現状である。特にここ最近では、企業スポーツの相次ぐ廃部や、Jリーグにおける東京ヴェルディ1969やFC岐阜の経営難など、企業スポーツチームならびにプロスポーツクラブのマネジメントの困難性が浮き彫りになってきている。

これまでいくつもの地域プロスポーツクラブが設立されているにも関わらず、そのビジネスモデルが確立されておらず、経営で成功するためのノウハウも蓄積されていないため、同じ失敗を繰り返している現状がある。

2. 研究の目的

本研究では、プロサッカークラブが持続的に成長していくために必要な施策や成功要因を明らかにする事を目的とする。プロサッカークラブの持続成長ビジネスモデルを構築することを最終的な目的とする。

3. 研究の方法

そこで本研究では、プロサッカークラブを主な研究対象として、プロスポーツクラブのマネジメント要素を構造的に検証し、持続成長ビジネスモデルを構築することをめざす。

- (1) Jリーグクラブにおける発展過程の分析・・・クラブが直面した「壁」とその壁を乗り越えるために行った「アクション」を中心に分析する。
- (2) 海外事例の資料収集と成功事例の選定・・・日本のクラブが参考にすべきモデルとなるような海外クラブを抽出する。
- (3) 海外クラブの分析とインタビュー調査・・・抽出したクラブの成功要因を明らかにする。
- (4) 応用可能性の検討・・・成功事例を日本においても応用できるか否かを検討する。
(2)～(4)海外のクラブチーム関係者等からのヒアリング調査を実施を追加し整理した。

4. 研究成果

1. Jリーグクラブが直面した壁とアクション

Jリーグは2008年をピークにJ1クラブの収入は減少傾向にあり、支出においては人件費と入場料確保が重要課題であることが示された。これらに対するアクションとして対戦相手による入場観客動員数、およびユース育成について追加の分析を加えた。

(1) 観客動員について

ホームゲーム開催時の観客動員数の変動要素として、相手方チーム(アウェイクラブ)の人気、強さが動員数に影響をもたらすことがわかった。

そして、チームによっては、対戦相手ごとに入場チケット価格を変動させ、収益をあげる工夫をするチームが出現した。(畔蒜、能智、平田.2012)

(2) 選手育成について

選手育成はチームだけでなく、日本代表チームへの影響も大きい。しかしながら、活躍する選手がどのような育成環境にあるのか、

またどのような育成環境にあったか、育成環境とチーム経営への影響は不明な点が多かった。そこで、Jリーグチームのユース代表選手がどれほど活躍しているかについて分析した。

Jクラブにおいてユース出身の選手が多かったのは東京ヴェルディと横浜Fマリノスで、さらに2010年度においてはガンバ大阪が多かった。Jクラブ全体では経年推移とともに人数は増えていた。さらにJクラブユース出身者のレギュラー率も2002年度は0.74だったが2010年には1.63へ増加していた。

しかしながら、所属チームの分析では、プレイしているチームとユース時代に所属したチームは必ずしも一致していないことがわかった。(兼清、平田.2012)

2. 海外の情勢調査と応用の可能性について

海外および日本のクラブ経営者へヒアリング調査した。その結果、欧州のチームにおいてはアジアの企業とスポンサー契約やアジアでのテレビ放映など積極的なアジアへの進出がうかがえた。さらに、欧州のチームにおいても対戦チームに応じてチケット価格を変動させており、選手の獲得においては、ユースでの育成だけでなく他国からの獲得、およびその獲得方法と排出について様々な工夫をしていることがわかった。

これらの結果を総合すると対戦チームに応じたチケット料金制の検討やユース育成に注力することが、健全なチーム運営・経営にチームの成長に欠かせない要因であることが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

・Jリーグにおけるアウェイクラブが観客動員数に与える影響に関する研究

畔蒜 洋平, 能智 大介, 平田 竹男

(スポーツ産業学研究 Vol. 22 (2012) No. 1)

・Jリーグクラブにおけるユース出身選手に関する調査

兼清 文彦, 平田 竹男

(スポーツ産業学研究 Vol. 22 (2012) No. 1)

[学会発表](計9件)

・2011年7月16日-17日、日本スポーツ産業学会大会、Jリーグにおけるアウェイクラブの集客力に関する研究

・2011年7月16日-17日、日本スポーツ産業学会大会、Jリーグクラブにおけるユース育成実績の評価

・2012年2月11日、日本スポーツ産業学会リサーチカンファレンス(基調講演) 震災後、そしてこれからの日本のスポーツビジネス-野球とサッカーを中心として-

・2012年07月14日~2012年07月15日、日本スポーツ産業学会大会、Jクラブにおける新入団選手の保有年数に関する研究

・2013年02月11日、日本スポーツ産業学会リサーチカンファレンス(基調講演)

~スポーツと国際戦略~WBCの舞台裏から~

・2013年02月11日、日本スポーツ産業学会リサーチカンファレンス、Jリーグクラブにおけるトップ選手育成に関する研究

・2013年02月11日、日本スポーツ産業学会リサーチカンファレンス、アジアで活躍する日本人サッカー選手に関する研究

・2013年7月13日~14日、日本スポーツ産業学会大会、Jリーグクラブにおける高学南方選手の出場時間とクラブ成績に関する研究

・2014年02月11日、日本スポーツ産業学会

リサーチカンファレンス、Jリーグクラブの
現状と課題に関する研究～Jリーグアジア戦
略～

〔図書〕(計2件)

・平田竹男、東洋経済新報社、スポーツビジ
ネス最強の教科書、2012、436

・平田竹男、桑田真澄共著、新・野球を学問
する、2013、283

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

平田 竹男 (HIRATA TAKEO)

早稲田大学・スポーツ科学学術院・教授

研究者番号:(00445868)

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：